View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

国立国語研究所学術情報リポジトリ

# 言語地図における孤例



| | |
|---|---|
| 著者 | 徳川 宗賢 |
| 雑誌名 | ことばの研究 |
| 巻 | 4 |
| ページ | 133-150 |
| 発行年 | 1973-12 |
| シリーズ | 国立国語研究所論集 ; 4 |
| URL | http://doi.org/10.15084/00001765 |

# 言語地図における孤例

徳　川　宗　賢

梗概――「日本言語地図」を使って，言語地図に現われる１地点でしか得られなかった特殊表現の性格を考え，その研究の発展の可能性を考える。

**1　孤例とは何か**　小論で扱う孤例とはどんなものをさすか。

1.1　何を孤例とするか――１枚ごとの言語地図の凡例には，10個・20個ないし100個・200個のさまざまな見出し語が見られる。その見出し語中には，調査地域内で50地点・100地点・300地点にわたって見られるいわば広領域語がある一方，２地点・３地点にしか見られない勢力の弱いものもある。さらに，わずか１地点にしか見られない特殊な表現もある。小論では，この＜１枚の言語地図の見出し語の中で，わずか１地点にしか見られない表現＞を孤例という。

亀井孝氏は『日本歴史』123号（昭和33年９月）に「孤例の処理」という文章を寄せた。その中で氏は，中華若木詩抄に見られる唯一例「○……ト云ワシモウゾ」に関する諸本間の異同について言及し，＜もとより「シム」「シモウ」につきての語学的記述にありては中華若木詩抄の一例を敬遠するのみにてことたれど，テクストにおける孤例の処置の困難は，なお儼として残るものといふべし＞と言い，さらに，同唯一例「○……御覧サラルル」についてはおそらく誤刻であろうが ＜もとより心理的には正保板の「御覧サラルル」も単に彫師の刀のあやまりのごとき機械的原因にのみは帰しがたき言語病理の現象なるべければ，かかる孤例には，いずれもまた孤例としての個性ありて，その闡明こそいろいろの興味深きわざなるべけれ＞と言う。

亀井氏の採り上げた孤例は特定文献中に見られる孤例であって，言語地図の孤例とは，多少ことなった性格を持っている。言語地図の孤例と比較すべきものを文献研究中にさがすとすれば，多くの文献を通時的に展望した場合，たとえば蛙をあらわす諸表現を得たとして，ある特定の文献にしか見られない特殊

な表現がそれにあたると言えよう。逆に亀井氏風の孤例を方言資料中に求めるとすれば，特定地点の長時間の自然談話録音資料の中に，1回しか現われない特殊表現ということになろうか。大局的には＜敬遠＞すればいいのかもしれないが，いずれにせよ，その＜処置の困難＞が＜儼として残る＞点や，その個性の＜闡明＞が＜興味深きわざ＞である点は，共通するものと思われる。

なお，ここでは，言語地図として『日本言語地図』を利用することにする。この地図には，調査地域が全国であり調査地点が2400か所である点をはじめ，それなりの個性がある。したがって，ここで扱うのは＜『日本言語地図』における孤例＞であって，言語地図一般における孤例のあらゆる側面についての考察には，当然他の言語地図における孤例の検討が必要である。

1.2　音声変種などの取り扱い —— 他に音声的類例があっても，その見出し語にあたる表現がその地図中に1地点しか現われない場合は，孤例とみる。たとえば『日本言語地図』149図「肩車」には，カトコマという表現が登録されている。そして，この表現は6643.71（方言調査基礎図の番号システムによる表示。静岡県焼津市大村新田の早川新治氏の回答。調査者は望月誼三氏）にしか見られないものである。類似のカタコマは12地点に見られるが，ここではこのカトコマを孤例とみることにする。

地図の見出し語は，結局作図時の整理分類の結果である。作図方針としては地点ごとの表現の差異をきわだたせる方向がある一方，たとえばカトコマをカタコマに摂してしまうといった大同につく方向もある。ここでは，現在できあがっている『日本言語地図』の見出し語の整理分類を基準とし，言語地図における孤例を考えることにする。たとえば149図「肩車」の第1見出しKATAUMA には〔katauma, kataɯma, kataũma, katamma, kataᵐma, kataʔmma, kaṭamma, kadamma〕などと表記されたものがまとめられている。なお3.3参照。

整理分類の問題を考えるにあたっては，ふつう音声的類例（ひらたく言えば語形の似たもの）だけに目を配ればよかろうが，場合によっては，意味的類例（語形は一致するが意味が多少違うもの）や文体的類例（語形・意味は一致するが文体の違っているもの）や，発生的類例（変な名前だが，語形は違ってい

て命名の発想の共通するもの）なども考慮しなければならないことがあろう。

1.3　＜その他＞の取り扱い――整理分類の結果としての『日本言語地図』には，調査に際して得られた全表現が登録されているとは限らない。作図者が他と勘案し，関係が薄いと判断したために省略されたり，あるいは＜その他＞などとして処置されたりしているものがある。ここでは，＜その他＞であっても，とにかくなんらかの形で地図上に表示のあるものは，原資料にもどり，1地点にしか見られないものであれば，孤例として扱うことにする。たとえば，『日本言語地図』148図「隠れん坊」では4740.93（山形県西置賜郡白鷹町大字荒砥甲字新町の横山政衛氏の回答。調査者は後藤利雄氏――以下この種の注記を省略する。詳しくは『日本言語地図』第1集付録の「日本言語地図解説――方法――」参照）のタネクラゴ，6546.15のトオバイコ，7316.65のイチニイサン，1211.69のワクユウなどは，＜その他＞としていちいちの見出しを立てず一括表示してあるが，ここでは孤例として扱う（これらの実体を知るためには，国立国語研究所地方言語研究室に保存されている「日本言語地図資料」中「見出し内容」を見る必要がある）。

調査時の被調査者の回答は，調査者によってそのすべてが記録されるとは限らない。誤答などは捨てられよう。そこに調査者の見識による選択が加わる。また，調査記録のすべてが地図上に登録されるとは限らない。その地図には，その地図なりの作図方針があるからである。『日本言語地図』は資料性を尊重しようとする傾向の強い地図であるが，それでも，資料の整理分類にあたって，例外的なものに対して＜敬遠＞の態度をとる場合がある。ここでは，敬遠したもののうち一部を発掘してみようというわけである。

1.4　調査記録の注記の取り扱い――調査者による記録の中でも，注記されている表現，あるいはそれに準ずると考えられるものは，『日本言語地図』上にその存在が反映していない。標準語的表現や，よそで使われる表現などがおもなものである。調査者が注記した表現中にも，作図者の判断で回答なみに扱って地図上に登録したものがある。しかし，結局注記あるいはそれに準ずると判断されたものは，地図上に登録されていない。これら地図上に登録されていないものは，全原資料中1地点のみからの報告であっても，ここでは孤例として扱わない。たとえば『日本言語地図』148図「隠れん坊」では，3786.44でカ

クレガッコと併用でジャドオオニコという表現が報告され，6567.79でカクレゴトと併用でキコイという表現が報告され，6611.61でカクレンボと併用でケントクという表現が報告されていた。ジャドオオニコ・キコイ・ケントクは，日本言語地図作成のための調査に関する限り，すべて全国唯一例，その地点のみからの報告であった。しかしこれらの表現は，作図にあたって注記に準ずるものとして処理されたため，地図上に登録されていない。したがって，以上のとりきめから，これらの表現はここでは孤例としなかった。なお2.3の後半参照。

ジャドオオニコの類と1.3で問題にしたタネクラゴの類とでは，本質的な違いはないのかもしれない。しかしどこかに一線を画する必要があるため，以上のように処置することにした。最終的に地図上に登録されているかどうかを，対象にするかどうかの分別の基準にしたのである。

**2　孤例の現われ方**　孤例は言語地図上にどんな現われ方をするか。

2.1　量その他――1枚の言語地図の中で，見出し語がかりに100個あるとして，孤例はその中でどのくらいの割合を占めるのであろうか。見出し語の多い地図と見出し語の少ない地図とでは，孤例の現われ方に差があるのだろうか。そんなことを考えてまず図表1を作った。

この図表1は，『日本言語地図』の中から任意に20項目についての地図を選び，孤例の現われ方を調べたものである。参考として，各言語地図中に，2地点にしか見られないもの（2例という），3地点にしか見られないもの（3例という），11地点以上に見られる勢力の強いもの（11例以上という）についても示してある。下欄の「肩車」を例にとると，見出し語総数466，そのうち孤例322，2例43，3例29，……11例以上27ということになる。それぞれの総見出し語数に対する割り合いを％で示した。

この表によって孤例が案外多いこと，総見出し語数は多くとも勢力の強い表現は案外少ないこと，などがわかる。†印をつけた項目の地図は特殊なもので（3.1参照），これらを除いた17項目についての平均値を最下欄に示した。総見出し語数に対する孤例率の平均は53.2％である。このことは，総見出し語数を100（17項目見出し語数平均151.5）とすると，そのうち孤例は53（80.6）ほど

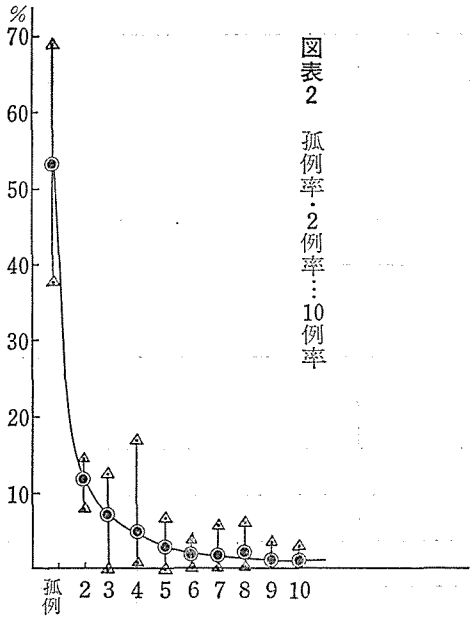
**図表 1**　孤例その他の現われ方（量）

| 図　番 | 図　　名 | 総見出し語　数 | 孤例 | （%） | 2例 | （%） | 3例 | （%） | 11例以上 | （%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 194・195 | ニワの意味† | 11† | 1 | 9.1† | 1 | 9.1† | 0 | 0.0† | 8 | 72.7† |
| 179 | イモの意味† | 13† | 2 | 15.4† | 1 | 7.7† | 0 | 0.0† | 5 | 38.5† |
| 158 | 綿 | 18 | 7 | 38.9 | 2 | 11.1 | 0 | 0.0 | 3 | 16.7 |
| 173 | ヌカの総合図† | 37† | 5 | 13.5† | 1 | 2.7† | 1 | 2.7† | 24 | 64.9† |
| 57 | 炊く | 48 | 24 | 50.0 | 4 | 8.3 | 6 | 12.5 | 6 | 12.5 |
| 106 | 顔 | 50 | 26 | 52.0 | 6 | 12.0 | 5 | 10.0 | 7 | 14.0 |
| 58 | 煮る | 64 | 35 | 54.7 | 6 | 9.4 | 7 | 11.0 | 8 | 12.5 |
| 151 | お金 | 77 | 29 | 37.7 | 10 | 13.0 | 8 | 10.4 | 20 | 26.0 |
| 159 | 真綿 | 81 | 48 | 59.3 | 8 | 9.9 | 3 | 3.7 | 12 | 14.8 |
| 180 | 南瓜 | 100 | 44 | 44.0 | 14 | 14.0 | 4 | 4.0 | 24 | 24.0 |
| 122 | 人差指 | 110 | 67 | 60.9 | 16 | 14.5 | 7 | 1.4 | 10 | 9.1 |
| 199 | 林 | 119 | 66 | 55.5 | 19 | 16.0 | 9 | 7.6 | 12 | 10.1 |
| 190 | 案山子 | 131 | 78 | 59.4 | 19 | 14.5 | 7 | 5.3 | 12 | 9.2 |
| 187 | 畦 | 138 | 79 | 57.2 | 19 | 13.8 | 9 | 6.5 | 13 | 9.4 |
| 168 | 粳米 | 150 | 74 | 49.3 | 21 | 14.0 | 11 | 7.3 | 26 | 17.3 |
| 107 | 頬 | 199 | 100 | 50.3 | 27 | 13.7 | 4 | 2.0 | 32 | 16.1 |
| 174・175 | 馬鈴薯 | 237 | 122 | 51.5 | 25 | 10.5 | 17 | 7.2 | 35 | 14.8 |
| 148 | 隠れん坊 | 267 | 179 | 67.0 | 21 | 7.9 | 19 | 7.1 | 19 | 7.1 |
| 145 | お手玉 | 321 | 150 | 46.7 | 32 | 10.0 | 29 | 9.0 | 36 | 11.2 |
| 149・150 | 肩車 | 466 | 322 | 69.1 | 43 | 9.3 | 29 | 6.2 | 37 | 5.8 |
| †を除く17項目平均 | | 151.5 | | 53.2 | | 11.9 | | 6.8 | | 13.6 |

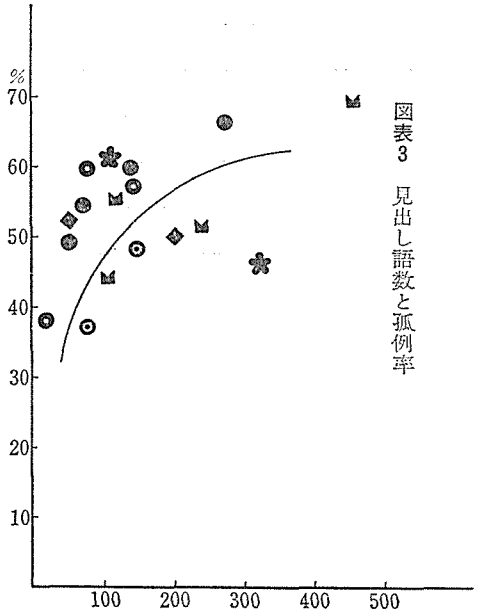
であることを意味する。

孤例，２例，３例……11例以上の総見出し語数に対する割り合いがどのような数値（平均値）を示すかを，図表２に示した。案外きれいな曲線になった。

孤例率53.2%は案外であると言ったが，『日本言語地図』の調査地点数は2400であるから，孤例の現われる地点は，総見出し語数100（151.5）とすれば，




図表2　孤例率・2例率…10例率




図表3　見出し語数と孤例率

53.2地点—2.7%(80.6地点—3.4%)に過ぎない。こう考えれば，孤例もやはり大したものではないことがわかってくる。

図ごとの孤例の現われ方に，傾向はないであろうか。図表1でははっきりしないが，それでも総見出し語数がすくなければ孤例率が低く，総見出し語数が多くなるほど孤例率も高まる傾向がありそうにも見える。17項目について，縦軸に孤例率を，横軸に総見出し語数をとって示したのが図表3であるが，ある種の傾向は見られるように思う。なお，符号の別については3.3で触れる。

実際の孤例とはどんなものか。11例以上とはどんなものか，それを見るために，以下に見本を示す。(イ)は58図「煮る」の孤例。(ロ)はその「煮る」の11例以上。(ハ)は159図「真綿」の孤例。(ニ)はそ

の「真綿」の11例以上である。

(イ) アユル，タキュイ，タキュリ，ニイッ，ニイユン，ニイロワ，ニエル，ニク，ニタク，ニヤカス，ニヤス，ニヤスン，ニユイ，ニユム，ニュム，ニュル，ニユン，ニルリ，ニロ，ニンル，ネエスン，ノル，バアスン，バカスィ，バガフン，バッス，バッスン，フカスィ，フカスン，フロフク，ワアシュイ，ワアスィ，ワカス，ワハシュン，ンニ。

(ロ) タク，タグ，ニイ，ニイル，ニイン，ニシメル，ニッ，ニル。

(ハ) イイチュ，イイトゥワタ，イギワタ，イズリ，イツリ，イトゥ，ウズワタ，エギワタ，エバ，オヤリ，カイクイトゥ，カイクヌイトゥ，カイコワタ，カイコノイトゥ，カケワタ，キイトゥ，キヌノワタ，キネバ，キマワタ，キワタ，ケボ，ザワタ，シェキワタ，チリバタ，チルワタ，ツウリ，ツルバ，ネバチ，ネビャシ，ネマ，ネヤシ，ヒチワタ，ベバワタ，マアタア，マアバ，マアバタ，マイガワ，マエノケワタ，マンワタア，ミイシ，ミイシワタ，ミンスウ，ミンチ，ムシワタ，ムゾゲ，ムリ，ワアタア，ンマタ。

(ニ) キヌワタ，ケバ，シキワタ，ツリワタ，ツルワタ，ネバ，ネバシ，ネバス，ネバワタ，ヒキワタ，マアタ，マワタ。

最後に余談になるが，『日本言語地図』と『全国方言辞典』との対比を試みよう。180図「南瓜」を例にする。まず，『日本言語地図』に11例以上見られ『全国方言辞典』に載っていないものを挙げよう。以下の13である。カブチャ，カボチャ，カボジャ，カンボチャ，トオナス，トナス，ナンク，ナンクッ，ナンクッン，ボオボラ，ボフラ，ボボラ，ボンボラ。もっとも『全国方言辞典』もナンキン，ボオフラ，ボオブラ，ボブラは載せているのであって，この辞典の，標準語形や音訛形を載せないという性格が反映しているだけのことである。次に，『日本言語地図』の孤例のうち『全国方言辞典』に載っていないものを挙げよう。44の孤例のうち，辞典にはわずかにキンカ，ボオタの2表現しか載っていない。もっとも孤例の中でも，アボチャ，カバチャ，カボシャ，カボチ，カンブチャ，クブチャ，コボキャ，コボチャ，ハブッツァ，ボオチャなどの類はカボチャの訛形として割愛されたのだろうし，同じくブブラ，ボオグラ，ボオビラ，ボオベラ，ボグラ，ボッダ，ボビラ，ボフ，ボンボンボラなどの類はボオフラ，ボオブラ，ボブラなどの訛形とみなされたのであろう。この取り扱いは，辞典の性格から当然ともいえる。しかし，カマウリ，スンブ，ナンカ，ナンカア，ナンバイゴ，ナンブ，ナンバンボオブラ，ナンキンボオブラなどの孤例（のうち一部）は，混交型が多いにしても辞典に載せてよいものであろう。『全国方言辞典』のもととなった資料が，まだ十分なものでなかっ

たことに原因があるのかもしれない。おわりに『全国方言辞典』には載っていて，『日本言語地図』に全く登録されていないものを挙げよう。すべて注記欄にも見当らないもので，次の9個の表現である。アササガオイモ（石見），アメリカイモ（石見），サツマウリ（広島県芦品郡），サツマユウガオ（備前—物類称呼），チョオセンイモ（石見），ナンキンウリ（大坂—物類称呼），ボオカ（三重県志摩郡），ボッバ（長崎県五島），ルスン（山形県庄内）。これらのうちサツマウリ，サツマユウガオ，ナンキンウリは，地図当該地域にそのままではないがサツマ，ナンキン，ユウガオが認められるので，地図の欠陥とまでは言えないものと思われる。ボオカ，ボッバについては，地図当該地域に類似形のボンカ，ボッダが見られる。アサガオイモ，アメリカイモ，チョオセンイモは，地図上に全く痕跡のないものであるが，『大辞典』『島根県方言辞典』『中国地方五県言語地図』に見えず，前の2個の表現は『日本国語大辞典』にもない（チョオセンイモは現在調べようがない）。その他2，3の文献に当たったが出典不明である。ルスンも地図に見られない表現であるが，これは明治期の『荘内方言考』に依ったものと思われる。

2.2　位置——ここでは，孤例がどんなところに現われるかについて考えたい。類例を持つものは，やはり類似表現の使用地域の近くに現われるのだろうか。そうだとして，類例の大分布領域の中心付近に出現するのであろうか。それとも周辺部に出現するのであろうか。いちがいに言えないにしても傾向はないであろうか。混交形は周辺部に多い，などとは言えそうな気もする。

意味のずれや文体のずれなどによって生ずる孤例が考えられるが，それらと原義・原文体の諸表現の分布との関係はどうであろうか。2例，3例といったものの出現位置はどうであろう。やはり隣接して現われる場合が多いのであろうか。

複数の地図を通じて，つまりアトラスとして見た場合，孤例の現われやすい地点や地域はないであろうか。孤例の現われにくい地域はどうであろう。孤例の出現位置の一般傾向と孤例の性格とは，何か関連がないであろうか。

思いつくままに問題点を挙げてみたが，いますべてを実証的に検討することができない。そこでここでは，孤例そのものではないが，2例の出現位置を，

さきに取り上げた17項目について考えてみることにする。『日本言語地図』の孤例は，調査地点の密度を高めれば（現在は平均12km間隔）２例，３例……になる可能性がある。そこで孤例を考える手掛かりとして，２例のものを見ることにする。

図表４は，さきに取り上げた17項目について，２例がいくつあり，同じ５万分の１地形図の範囲内に現われたものがいくつ，隣接する５万分の１地形図同志の間に現われたものがいくつ，それ以外のものがいくつあるかを，実数と％とで示したものである。最後に平均を示した。たとえば「肩車」についていう

**図表４**　２例の現われ方（位置）

| 図　　名 | 2　　例 | 同地図 | （%） | 隣地図 | （%） | その他 | （%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 綿 | 2 | 1 | 50.0 | 0 | 0.0 | 1 | 50.0 |
| 炊く | 4 | 1 | 25.0 | 1 | 25.0 | 2 | 50.0 |
| 顔 | 6 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 6 | 100.0 |
| 煮る | 6 | 1 | 16.7 | 2 | 33.3 | 3 | 50.0 |
| お金 | 10 | 0 | 0.0 | 1 | 10.0 | 9 | 90.0 |
| 真綿 | 8 | 1 | 12.5 | 4 | 50.0 | 3 | 37.5 |
| 南瓜 | 14 | 3 | 21.4 | 6 | 42.9 | 5 | 35.7 |
| 人差指 | 16 | 4 | 25.0 | 2 | 12.5 | 10 | 62.5 |
| 林 | 19 | 2 | 10.5 | 1 | 5.3 | 16 | 84.2 |
| 案山子 | 19 | 3 | 15.8 | 3 | 15.8 | 13 | 68.4 |
| 畦 | 19 | 3 | 15.8 | 5 | 26.3 | 11 | 57.9 |
| 粳米 | 21 | 2 | 9.5 | 6 | 28.6 | 13 | 61.9 |
| 頬 | 27 | 2 | 7.4 | 14 | 51.9 | 11 | 40.7 |
| 馬鈴薯 | 25 | 3 | 12.0 | 8 | 32.0 | 14 | 56.0 |
| 隠れん坊 | 21 | 3 | 14.3 | 5 | 23.8 | 13 | 61.9 |
| お手玉 | 32 | 7 | 21.9 | 13 | 40.6 | 12 | 37.5 |
| 肩車 | 43 | 7 | 16.3 | 13 | 30.2 | 23 | 53.5 |
| （平均） | 17.2 | | 14.4 | | 28.8 | | 56.8 |

と，総見出し語数466中２例の見出し語43，このうち同じ５万分の１地形図の範囲内に現われたもの７，隣りあった５万分の１地形図２枚の範囲内に現われたもの13となる。これら20種の２例は，ごく狭い領域を占める表現である可能性がある。つまり調査地点の密度を高めれば，これらの表現は３例４例……になるかもしれない，ということになる。残りの23種の２例は地点密度を高めればふたつの小領域語になるにしても，ひとつの領域を浮かび上がらせる可能性はほとんどないのであろう。43種中20種というのは46.5％（全体の平均なら43.2％）であるが，このことは，現在の孤例中すくなくとも約半数が，調査地点密度を高めれば，小領域を浮かび上がらせる可能性を秘めているということに通じようか。

2.3　単用と併用の違い――孤例の現われ方については，以上のほかに，その表現が単独で現われるか，それとも他の一般語形との併用で現われるか，という問題がある。孤例は特殊なものだから併用として現われる傾向が強いのではないかと予想されるが，はたしてどうであろうか。併用の場合は各表現について意味や用法の違いについて注記のある場合が多いので，孤例の性格を明らかにする上での手掛りが得られるかもしれないとも考えた。また，一般に誤答などによる異分子混入の孤例が予想されるとして，併用で現われる孤例にはその危険が少ないのではないかなどとも考えた。

図表５では，17項目について，孤例数，単用で現われる孤例数(％―単用率)，併用で現われる孤例数（％―併用率）を示し，下欄に平均を示した。

意外に，単用で現われる孤例の多いことがわかる。中で「綿」「顔」「お金」「馬鈴薯」「畦」「林」の各項目では併用が多い。これらの図は，「綿」などのように孤例絶対数の極く少ないものはそう言えないにしても，一般的に併用の多い図なのかもしれない。各図を通じての一般的な併用率（一般語の併用を含む）についての見通しがはっきりしないので断言はできないが，併用率（孤例の併用率・一般語の併用率を含む）はおそらくその項目の性格の一部を示すものであろう。

1.4で触れたように，『日本言語地図』では一方が一般表現であり他方が特殊表現であるときに，特殊表現を注記なみに扱う処置をとる場合があった。特殊

**図表 5**　孤例の現われ方（単用・併用）

| 図　　名 | 孤　　例 | 単　用 | （%） | 併　用 | （%） |
|---|---|---|---|---|---|
| 綿 | 7 | 2 | 28.6 | 5 | 71.4 |
| 炊く | 24 | 21 | 87.5 | 3 | 12.5 |
| 顔 | 26 | 8 | 30.8 | 18 | 69.2 |
| 煮る | 35 | 30 | 85.7 | 5 | 14.3 |
| お金 | 29 | 9 | 31.0 | 20 | 69.0 |
| 真綿 | 48 | 35 | 72.9 | 13 | 27.1 |
| 南瓜 | 44 | 32 | 72.7 | 12 | 27.3 |
| 人差指 | 67 | 59 | 88.1 | 8 | 11.9 |
| 林 | 66 | 28 | 42.4 | 38 | 57.6 |
| 案山子 | 78 | 50 | 64.1 | 28 | 35.9 |
| 畦 | 79 | 33 | 41.8 | 46 | 58.2 |
| 粳米 | 74 | 46 | 62.2 | 28 | 37.8 |
| 頬 | 100 | 72 | 72.0 | 28 | 28.0 |
| 馬鈴薯 | 122 | 44 | 36.1 | 78 | 63.9 |
| 隠れん坊 | 179 | 146 | 81.6 | 33 | 18.4 |
| お手玉 | 150 | 150 | 100.0 | 0 | 0.0 |
| 肩車 | 322 | 272 | 84.5 | 50 | 15.5 |
| （平均） | | | 71.5 | | 28.5 |

表現といっても他に類例のある場合はできるだけ地図上に登録したが，言語地理学的に処置の困難なものや特殊な用法のものは，凡例も混雑するし，作図者の判断で＜敬遠＞する場合があった。特殊表現でも，単用の場合はその地点で調査が行なわれたことを示すために何らかの形で地図上に表示する必要があるが，併用の場合は特殊表現を注記化しても調査の行なわれたことはわかる。

この項では孤例の単用・併用の違いについて述べているが，『日本言語地図』に関する限り，以上の点を考慮しなければならない。そして，その実体は，国立国語研究所地方言語研究室に保存されている『日本言語地図資料』のうち，

「注記一覧」を見なければならない。そういってつきはなしたままではいかにも不親切なので，併用率の高いもの低いものをつきまぜて，以下(イ)「お金」，(ロ)「馬鈴薯」，(ハ)「畦」，(ニ)「隠れん坊」，(ホ)「肩車」，(ヘ)「人差指」，(ト)「お手玉」について，注記中に隠された特殊表現を列記してみる。

(イ) イノシシ (6508.06)，マル (6635.87)，モチアクセ (5645.89)——すべて特別な意味用法を持つ。

(ロ) なし。

(ハ) カド* (5618.43)，キワ (7412.26)，ズベ (8361.28)，セメ* (5722.37)，ナカバキ (2150.17)，ハバ* (5652.81, 5663.64)，マブ (6582.73)，ワキ* (6429.15)——*印の諸表現は特殊な意味用法を持つものであった。無印のものの中にも同様のものが含まれているかもしれない。

(ニ) カクレサンボ (5662.78)，カクレシェイボ (7368.32)，キコイ (6567.79)，ケントク (6611.61)，ケンボオ (7502.89)，サガシゴト (6570.89)，ジャドオオニコ (3786.44)，ミツケ (7500.24)，モガモガ (9322.52)，モンジイ (6645.62)，リキリキ (7349.07)。

(ホ) シャンシャン (7382.97)——ただし児童語。

(ヘ) なし。

(ト) アゲダマ (5615.28)，イイコ (7501.14)，イチニズ(6429.15)，イッキ(7332.97)，イッコラショ (6591.81)，イッチンリキ (7342.12)，イツツボコ (6428.13, 6428.26)，オシダマ (6526.08)，オジャ (7510.18)，オチャボコ(6500.80)，オテアゲ(7322.79)，オテナワ (6489.01)，オニコ (5671.11)，オフリコ (6539.60)，オンバラ (6459.87, 7324.96)，クリコ (7303.75)，コオトオ (6665.01)，サイコ (6533.31)，シッチョコ (5527.94)，シャカシャカ (7385.61)，ジュウスダマ(4710.18)，タマドリ(6595.90)，タメンダマ (4783.74)，ダンゴ (6436.33)，チャガラコ(3702.89)，トオド(8373.08)，トンキンナゴ (7385.61)，ドンツ (6567.79)，ドンツバキ (6577.86)，ヒイコ (6491.49)，ヒキネコ (7309.37)，ミイキョ (7342.10)——オテナワはオテダマの変種とすべきだったろう，など，考慮すべきものもある。

以上から隠れた併用の孤例については，図による差の大きいことがわかる。とくに「お手玉」について特殊表現の多いことが目立つが，この図はもともと併用孤例皆無という特殊な地図であった。ただし，「お手玉」についてこの特殊表現をすべて図上に示しても，単用率82.9%，併用率17.1%になるだけであるから，大きな変動はない。

**3 調査法・作図法との関係** 2と重複する点もあるが，別の角度から考える。

3.1　項目の性格との関係――2.1で，20項目の地図について孤例の量を見たが，項目の性格と孤例の現われ方との関連は，さらにいろいろ考えるべきであろう。見出し語数の多い（方言量の多い？）項目は孤例率も高そうなことはすでに述べた。そのほか，動詞項目は孤例がすくないとか，遊戯に関する項目は孤例が多いとか，言えるかもしれない。ただし，現在の手持ちの材料だけからは，とうてい一般化できそうもない。2.3で孤例の併用率が項目の性格と関係するかもしれないと言った。しかしこれも，まだはっきりしない。

ただ20項目のうち，「ニワの意味」「イモの意味」の地図はいわゆるＳ式質問によるものであって，特別な性格があるぐらいは言えそうである。また「ヌカの総合図」も特別視できよう。調査法についてはいま取り上げることができないが，日本言語地図風のいわゆるナゾナゾ式質問によらない調査について，孤例がどのように現われるか知りたいものである。文法現象についての調査項目ならどうなるかも知りたい。

3.2　調査地点密度との関係――2.2で述べたように，地点密度を高めれば『日本言語地図』の孤例のうちあるものは付近に同表現のあることが明らかになり，実は小領域語であることが明らかになる可能性がある。こうなれば特殊表現として敬遠されたものも，再び浮かび上がる可能性があるわけである。このことは孤例と小領域語との関係の深さを示す。無論，いくら地点密度を高めても最後まで孤例として残るものも現実にありうるとは，考えておかねばならない。このことは，地点密度が高まるにつれて，『日本言語地図』には現われていない新しい孤例が次々に現われてくる可能性のあることを示す。こうして地点密度を変えたとして，その項目の孤例率ははたして変化するであろうか。その出現位置関係や併用率などに変化が見られるであろうか。そんなことも考えてみる必要があると思うのである。当然小地域の微視的言語地図との比較が必要となろう。また孤例ばかりを扱わず，２例・３例などのいわば僅少例をも併せて考察することが必要になってくるかもしれない。

3.3　作図法との関係――地図作成者にも個性がある。その個性が，作図方針として数枚の地図を通じて一貫して現われるかどうかはわからないが，作図方針には，極端に言えば孤例をどんどん表示していく型（資料型？）と，孤例を

どちらかというと類例の中に含ませたり敬遠したりする型（解釈型？）とが考えられる。『日本言語地図』は，複数の研究者の共同研究による産物であるが，一枚ごとにおのずから中心的な作図者ができる。図表３の各種の符号は，実は17項目の各地図の中心的な作図者６人の別を示したものであったが，ある種の傾向はほの見える。◉と◎の２人はどちらかというと孤例率の高い――孤例をどんどん出す？――作図者であり，⊙は孤例率の低い――孤例を嫌う？――作図者のように見える。もっとも項目の性格もからんでくるから，わずかな例から強いことは言えない。

**図表６**　見出し語改編の試み

| 図　　名 | 総見出し語数 | 孤例　(%) | ２例　(%) | ３例　(%) | 11例以上　(%) |
|---|---|---|---|---|---|
| 煮る | (64>) 11 | 4　36.4 | 1　9.1 | 1　9.1 | 4　36.4 |
| 真綿 | (81>) 49 | 25　51.0 | 8　16.7 | 2　4.2 | 8　16.7 |
| 人差指 | (110>) 55 | 35　63.6 | 8　14.5 | 2　3.6 | 3　5.5 |
| 案山子 | (131>) 73 | 43　58.9 | 8　11.0 | 2　2.7 | 11　15.1 |
| 粳米 | (150>) 83 | 32　36.6 | 14　16.9 | 7　8.4 | 23　27.7 |
| (平均) | | 49.7 | 13.6 | 5.6 | 21.3 |

図表６では，５項目についてだけであるが，現在の『日本言語地図』の見出し語を減らす方向に改編してみる，いいかえれば孤例を類例の中に統合する方向で改編してみる試みの結果を示してみた。無論あるレベルでの試みに過ぎない。ここでは，『日本言語地図』の「煮る」の見出し語64を11にまとめてしまい，「真綿」の見出し語81を49にまとめてしまった。図表１と比較すればわかるように概して孤例率は低下するが，「人差指」などはむしろ孤例率が高まっていて注目される。作図法は孤例についてあまり大きな影響を与えない，ということになるのかもしれない。

実際にどんな孤例が消えどんな孤例が残ったかを，２.１に準じて(イ)(ロ)(ハ)(ニ)で示そう。

(イ)　アユル，ニタク，ニヤカス，フロフク。

(ロ)　タク，ニシメル，ニル，ワカス。

(ハ)　イイトゥワタ，ウズワタ，エバ，オヤリ，カイコワタ，カケワタ，キイトゥ，キヌ

ノワタ，キネバ，キマワタ，キワタ，ケボ，ツルバ，ネヤシ，ベバワタ，マアバ，マイガワ，マエノケワタ，マンワタア，ミイシワタ，ムシワタ，ムゾゲ，ムリ，ンマタ。

(二) キヌワタ，ケバ，ツリワタ，ネバ，ネバシ，ネバワタ，ヒキワタ，マワタ。

4　**孤例の性格**　3.2で見たように，地点密度を高めてもやはり孤例が残るようである。3.3で見たように，分類の基準をいくらか変えてもやはり孤例となるものがある。いったい，孤例にはどんな性格のものが含まれるのであろうか。

4.1　正常な孤例――地点密度が低いために現われるものは，結局小領域語なのであろう。整理分類などの作図方針の基準の厳しさによって現われるものは，結局一般語形の変種なのであろう。これらは，4.2で述べるものとは性格が違う。また，地点密度をいくら高めても，また整理分類の基準をいくらゆるくしても孤例として残るもののうちにも，4.2で述べるものとは違うものがありうる。最も古い層の露頭などである。新しい発生（病理的変化――切断・複合・語原解釈・類推などによる――を含む）の萠芽などもある。語形の上だけでなく，意味のずれや文体の動揺などによって生じた孤例もあろう。

4.2　誤った孤例――孤例の中には4.1で示したもののほかに，話者の思い違いや言い誤り，調査者の聞き誤りや記録ミス，地図作成時の資料の見損いや地図上への誤記入などによる孤例がありうる。もっとも，これらのうちあるもの，特に話者段階のもののうちあるものは，4.1で言及した病理的変化と連続するものと言えよう。このあたりに言語資料の＜処置の困難さ＞と，ひとつひとつの孤例の個性の＜闡明＞の＜興味＞があるのであろう。

4.3　孤例の検証――では，孤例の性格を明らかにするためには，どのような手続きによればいいのであろうか。作図段階の手落ちを想定するならば，原資料を点検すればいい。調査者の報告段階のミスを想定するならば，報告とフィールドノートとの比較が望まれる。そして，それ以前の調査段階に何かあったのかもしれないと考える場合は，もはや再調査しかない。

まず，話者当人に再質問する方向がある。話者に思い違いや言い誤りがあったのかもしれないという想定の場合は，多くこの方向がとられるであろう。話者が第1回の回答を変えない場合は，同地点の別人ないし周辺地域での小調査

が必要となる。話者が第1回の回答を撤回した場合も，再質問にこそ問題があったのかも知れないと考え，念のため同地点の別人ないし周辺地域の小調査を行なったほうがいい場合があるかもしれない。話者への再質問が不可能な場合は，同地点の別人ないし周辺地域での調査による傍証しか得られない。

もしその孤例が小領域語であるとの想定に立つならば，話者への再質問はむしろ後回しにして，周辺地域での検証を先に行なう方向がある。周辺で同回答が得られれば，それはおそらく小領域語である。もし周辺で同種の回答が得られない場合は次第に話者当人に接近する。ついに話者自身のみがその表現を答えるという状態になれば，<天下の孤例>が発見されたことになる。もっとも<天下の孤例>といっても，実はかなり離れた未調査地域にその表現が潜在している可能性があるから，理論的には，全日本語人について検証調査を行なって，はじめて<天下の孤例>が確認されることになる。周辺も認めず話者自身も認めないことが確認されれば，その孤例は誤まった孤例と考えられる。

話者も認めず周辺も認めない4.2的孤例が発見された場合は，その性格を，言語病理の方向と調査技術の方向とから解明していかなければならない。4.1的孤例の性格の解明は，周辺の言語環境や人文地理的環境を利用しての，言語地理学が本領とする一般的な諸技法を利用すればいい。

孤例のうちあるものが小領域語であったとなれば，そこには，他の小領域語とあわせてこの<言語地図における小領域語の研究>という新しい分野が開けるであろう。おそらく，そこでは<単領域語—孤例に近い>，と<複領域語—2例・3例に近い>との区別が必要になろう。ここでは，そうなる可能性のあるものを含めて，『日本言語地図』の孤例を話題にしてきた。

4.4　孤例分類別案——柴田武氏は，孤例を次のように分類して見せた。

(A)　真の孤例

(1)　歴史に古いものの露頭。

(2)　新しい発生（個人語）。

(3)　意味上・文体上などの異なったレベルの表現。

(4)　ミスによるもの。

(B)　みせかけの孤例

(5) 地点密度を高めることによって解消しうるもの。

(6) 分類基準を変えることによって解消しうるもの。

そして(A)のうち地図に記入すべき順位は(1)(2)……であり，地図上から抹消すべき順位は(4)(3)……とした。(1)～(4)の区別が2例・3例のものにも準用できるとすれば，筆者には(3)を抹消すべきものとするのは，やや疑問である。しかし柴田氏が言語地図は資料を示すためのものでなく，資料は別途公開すればいいという考えに立つことからすれば，これは当然かもしれない。

5 **孤例研究の意義** 認めうる孤例には，それなりの意味があるはずである。たとえ個々のマップの研究では<敬遠>される孤例にも，アトラスとして見るときには，新しい意味を付与することが可能となろう。小領域語と併せて考えることが生産的かもしれない。

5.1 命名の可能性・変形の可能性——命名法の研究や変形法の研究は，全見出し語の半数を占める孤例を除いては，その価値が減少する。言うまでもないが，ここでいう変形とは，語形上の変形ばかりでなく意味上のずれや文体上の動揺をも含む。特殊な命名法の行なわれる地点や，注目すべき変形法の卓立する地域が指摘できればおもしろい。

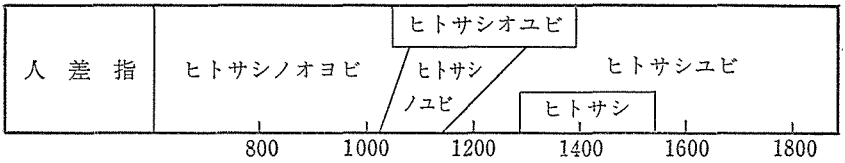
5.2 地点の性格・地域の性格——命名法・変形法の地域性のほかに，孤例をならして考えて，その出やすい地域や出にくい地域といったものが発見されればおもしろい。言語地図作成のための調査は，特定話者・特定調査者による個々の具体的な場において行なわれるが，孤例の現われ方はその個性の尺度として利用できるかもしれない。

5.3 項目の性格——3.1で述べたように，孤例の現われ方は調査項目の性格を暗示するであろう。何について調べるかといった項目の内容のほかに，その調査項目の質問法に関係した問題も当然介入してくるであろう。

5.4 アトラスの性格——アトラスの性格は，調査計画のスタートの段階ですでに形成されるのであろうが，その個性は，作図に及ぶプロセスでいよいよ顕著になっていくものと考えられる。もしここに孤例のひとつも登録されていないアトラスがあったとすれば，それはすくなくとも『日本言語地図』とはかなり違ったアトラスだ，ということになる。

5.5　歴史的変化への類推――言語の地理的分布相と歴史的分布相との間に通ずるものがあるとすれば，言語地図における孤例の現われ方から，歴史的変遷過程にも同様なことがあったのではないかと推理できる。言語地図に大領域語と孤例とがあるのに似て，歴史的変遷過程にも息の長い表現と泡沫的表現とがあるのではないか，というのである。

図表7　「指の呼び方について」（前田）




前田富祺氏の『文芸研究』56集（昭和42年7月）の「指のよび方について」によると，たとえば「人差指」をあらわす表現には歴史上5つの主な語形があるという。図表7は同論文から引用させてもらったが，これらの5つの表現はいわば息の長い表現で，言語地図上の，勢力の強い表現にあたるのではあるまいか。『日本言語地図』122図の「人差指」に現われる11地点以上の表現は，次の10種であった。サシユビ，シトサシイビ，シトサシユビ，ヒトサシ，ヒトサシイビ，ヒトサシイベ，ヒトサシエビ，ヒトサシユビ，フトサシエビ，フトサシユビ。『日本言語地図』の場合は，この10種の勢力の強い表現に対して，イトサキ，ゴスンユビ，シタサシユビ，チュウサシウイビ，トゥンタチイ，ピトゥシャシウイビ，モノサシエビ，ヤマタカユビなどの67種の孤例やピトゥシなど16種の2例，サンニョオユビなど7種の3例……が見られた。このことから，歴史的変遷過程にも，この5種の主な語形をめぐって，かなりの泡沫的な表現が，文献上に確認できるかどうかは別として，あったのではないかと考えられる。将来，地理的・歴史的な立場を越えた「言語における泡沫的現象」といった観点からの包括的研究の期待される所以である。

<付記>日本方言研究会（昭和46年10月・山形）での発表を纏め直したものである。当日，グロータース・佐藤茂・佐藤亮一・真田信治・柴田武の各氏から御意見を伺うことができた。採り入れた点も多い。記して感謝の意を表する。